

# やまぶき

田舎の和算研究の個人通信

(題字 伊藤武夫氏)

## 4

### 犬目兵助のこと いぬめのひょうすけ

甲州街道犬目宿の水越兵助(一七九七〜一八六七)は、天保七年(一八三六)八月の甲州郡内騒動(甲州一揆)を下和田村の森次左衛門(武七)と共に指導した人物。時に兵助は四十歳、次左衛門は七十歳であった。次左衛門は自首して捕えられ獄死したが、兵助は磔刑の判決が出ていたものの各地を逃亡の末上総木更津に隠れ、その後帰郷し、生き延びて七十一歳で没した。

この人物のことは文献(1)(2)などの「和算解説書」にも書かれている。遊歴和算家とは少し違うが、逃亡中に書いた日記が残されていて、各地でそろばん・算術を教えたことから書かれるようになったのだろう。

文献(2)ではそろばんで「比例計算、金や銀、あるいは銀と銭の両替算、中には開平方や開立法」を教えて欲しいという農民の希望を叶えながら逃亡(の旅を)したとある。

第61号 令和元年(二〇一九) 五月三十日

発行部数 十五部 (不定期刊行)

発行者 東京都羽村市

山口 正義

日記からの逃亡ルートは秩父に出て高崎・長野から北陸へ。それから舞鶴・福知山・岡山、そして四国に渡り、和歌山・奈良・京・津へと続く次のようなルートである。

犬目―三峰―高崎―榛名山―善光寺―高田―糸魚川―富山―金沢―小松―福井―敦賀―由良―天橋立―福知山―上郡―児島―丸亀―琴平―観音寺―西条―松山―今治―大島―岩国―宮島―広島―福山―岡山―竜野―姫路―西宮―大阪―堺―高野山―大峰山―奈良―京都―大津―津―伊勢山田(この後は日記破損か不明)

逃亡の途中からは「追っ手のないことを確信し、その面では気持ちが悪くなったように見受けられる」と文献の資料にはある。

四月十七日、犬目宿を訪れてみた。そこは中央高速の談合坂SAの近くで、SAを見下ろせる高台にある小さな宿場町は昔の雰囲気少し感じ取れるような処であった。



兵助の家は名主に近い家柄で、妻は犬目宿近くの四方津村の名主の娘であった。兵助は村の指導者になるだけの教養を身につけていた。「読み書きそろばん」は当然として、塵劫記に出てくる算術位は身につけていた可能性はあるだろう。

この時期になると貨幣経済の進展で農民も様々な計算が必要になって来る時期で、そろばんの必要性が出てきて、それが兵助の逃亡中に生かされることになった。

日記は欠損があり九月六日の途中から翌年八月までの一年あまりで後ろも欠けている(欠損は身の安全を考えて自ら破り捨てたとの推測もある)。そろばん・算術関係の記述は二十三ヶ所あるが幾つか示したい。

○(十月)廿二日右村(磯村)出立、夫方中村(福知山市)百姓新蔵宅ニ而そろばんおこ之み申候ニ付泊申候。(「そろばん」の文字の初出)

○廿四日右村(中村)出立、夫方猪崎村百姓辰兵衛ト申者宅ニ泊り申候。尤此家ニ〇廿五日〇廿六日〇廿七日〇廿八日尤同人悴二五日之間、そろばんおしえており申候。

○(十一月)十日方十二日迄三日之間、そろば

ん并家相二而とうりう(逗留、西脇市)仕、(後略)  
○廿七日右村磯上村・岡山県瀬戸内市同人宅出立  
(の)積り二御座候所、算実(術)好二付とうりう  
仕候間猶又泊り候。

○(二月)十三日(略)東明神村(愛媛県)百姓永  
之丞宅ニ、泊り申候。尤此家ニ而ハ算無心ニ  
付十四日る十七日迄仕(指)南仕候。(後略)

○(四月)廿日右村(大三島・今治市)出立、夫方大  
三島山(大山祇神社)へまいり申候。夫方同島内ひ  
かい(肥海)村ニ而庄屋ニ付、差宿ニ而同村百姓  
喜平次ト申者ニのそみニ付開平開立伝次授  
仕、善(ごん)に相成申候。□泊り(申候。)

(開平開立)まで教えている)  
○(六月)廿三日右村(中道村・和歌山県橋本市)寺観  
音寺出立の所、ひる時迄算術の書印申候。夫  
方ひる時出立、(後略) (算術の書を書い  
ている。寺に奉納したのか?)

これらの記述から、百姓からのそろばん教  
授の要望が強いこと、場合によっては四々五  
日も同じ場所で教えていたことや、開平開立  
まで教え、また算術書まで認めていたことが  
わかる。逃亡の最中とは思えない活躍で、こ  
の特技が逆に逃亡を助けたのかも知れない。  
その後伊勢あたりからか海路で江戸に向い、  
その後木更津に住み着き、姓を水越から奈良  
に変え、そろばんの寺子屋を開き、妻も呼び  
寄せて生活したという。さらにその後犬目宿  
へ帰って慶応三年(一八六七)二月七一歳で

亡くな  
ったと  
いう。

泰山瑞  
峯居士  
という。  
一揆の

首謀者が逃亡に成功し、生き延びた極めて稀  
有な例と思われる。

また、逃亡に先立ち妻りんを離縁した「離  
縁状」や「書置之事」「書置一札之事」「何れ  
も兵助の書」、それに「次左衛門自首書」など  
が残っていて当時のことを具体的に知ること  
ができ、興味が尽きない。

なお文献(2)は、兵助はそろばん・算術を  
落合周八郎俊明に学んでいた可能性が高いと  
している。落合は『甲陽算鑑童蒙知津』の跋  
文を書いている五人の一人だが詳細不明。

早大図書館の『本朝算鑑童蒙知津』(安永  
惟正、文政三年)は題簽が「本朝算鑿鑑」  
で、内題序は「本朝算鑑童蒙知津序」とあり、  
もう一つの序は「甲陽算鑑童蒙知津自序」と  
ある。安永惟正は、最上流の四天王と言われ  
た市瀬惟長の門人で、文献(5)には、

「市瀬惟長の門人に安永惟正あり、通称傳語、  
字は之供、格齋と号す。檀山堂とも号す。江  
戸の人、本石町に住む。文化八年二一天作五

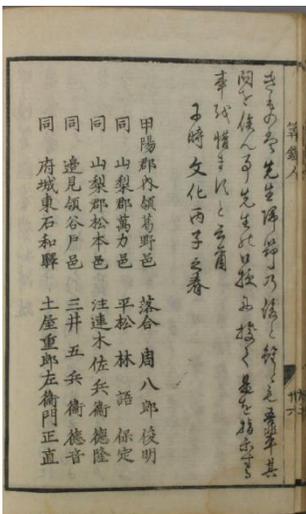


犬目村兵助之碑

を著す。甲州に遊歴し石和に留まりて教授す。  
依て峽算須知の足らざる所を見て、甲陽算鑑  
童蒙知津を著す。題簽には本朝算鑑とある。

本朝算鑑天地人三巻内題甲陽算鑑童蒙知津 文  
化十三年丙子孟春於甲陽石和驛旅館、江戸格  
齊居士安永橋惟正之供自序、文政庚辰(三年)  
嘉平月平安濤山小島好謙序、文化丙子(十三年)  
之春跋(甲州の門弟五人の連名) 甲斐は徳川時代  
に入っても武田の舊政三ヶ條を許さる(貢を収  
むるに大小切の法、金銀貨錢に甲金の法、量数に三升枰  
の法、故に算法にもそれを取り入れる)、とあ  
る。つまり石和に遊歴して『甲陽算鑑童蒙知  
津』を著している。自序を読むと書名は武田  
信玄の『甲陽軍鑑』を参考にしているようであ  
る。跋文の五名は次のように記されている。

- 甲陽郡内領葛野邑 落合周八郎俊明
- 同 山梨郡萬力邑 平松林語保定
- 同 山梨郡松本邑 注連木佐兵衛徳隆
- 同 邊見領谷戸邑 三井五兵衛徳音
- 同 府城東石和驛 土屋重郎左衛門正直



甲陽算鑑童蒙知津の跋の5人の名前

参考文献

- (1) 弦間耕一『和算家物語』
- (2) 佐藤健一『和算家の旅日記』
- (3) 深谷克己『八右衛門・兵助・伴助』
- (4) 増田広実『甲州郡内騒動頭取犬目村兵助と「逃亡日記」その他』『歴史評論』338号
- (5) 『明治前日本数学史』(第五卷)

藤田雄山貞資先生顕彰会の講演会

去る四月二十九日(月)、深谷市川本公民館で藤田雄山貞資先生顕彰会の講演会があり拝聴してきました。講演会は群馬県和算研究会からの連絡で知りました。

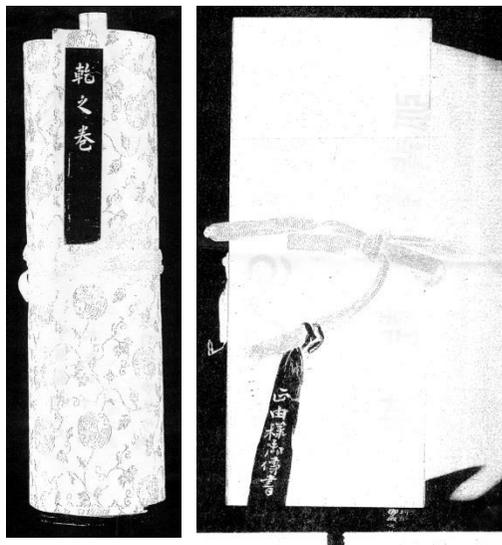
演題は「藤田貞資と紀州徳川家」で、講師は電気通信大学の佐藤賢一先生でした。日本学士院の藤田貞資関連資料(重要文化財)がネット上で公開されていることや、紀州徳川家七代宗将(むねのぶ)の十一男頼朴(よりな)と貞資の関係などの話があり、大いに参考になりました。また関流四伝書にも少し触れていました。

貞資と紀州徳川家頼朴のことについて少しまとめてみます。講演資料に、『山路君樹先生茶話』に「右ハ藤田雄山先生、阿部播州侯江算術御指南之序、御咄申上

ラレシヲ、トテモノ義、書付見スヘシト命ニ依テ書サレシ処ナリ」とあり、藤田は有馬家の他に大名の門人(紀州徳川家)を指南していたことが分かる、といえます。その証拠として学習院大学史料館に『乾坤之巻』(二軸、陸奥国棚倉藩主・華族 阿部家資料)があり、日付は寛政四年(二七九二)閏二月、箱書に「藤田権平定資伝授之 寛政四年壬子閏二月二十八日 源頼朴「朱印」とあるといえます。その史料は「弧背真術 乾坤」で、そのコピーも配布されました。紀州徳川家に差し出したものは学士院にある同等の文書より文字が丁寧で、宛名がない(殿様の名前は書けないので)ということでした。

改めて調べてみると、頼朴は寛政五年(一七九三)一月に忍藩主阿部正識の養子となり寛政八年に阿部家の家督を相続して九代正由(まさより)になり、寛政十年奏者番、享和元年(一八〇一)七月寺社奉行、文化元年(一八〇四)一月大坂城代、文化三年十月京都所司代と幕府の要職を歴任した。文化五年(一八〇八)十月十一日に死去。「弧背真術」は阿部家に入家する前に取得した和算の伝授書といえます。また日本学士院には「乾坤之巻」というのがあります。大正七年六月に貞資の子孫藤田菊弥氏より寄贈された貞資関係の一連の資料は平成五年に重要文化財に指定されていますが「乾坤之巻」はその一つです。「乾坤之巻」

にある「弧背真術」は学習院のものと同文ですが、字体が少し違うように見えます。なお阿部家は、備後国福山藩主阿部家を宗家とする譜代大名で、寛永十二年下野国王生城主、ついで武蔵国忍に移る。文政六年には陸奥国白河へ移り、さらに慶応二年陸奥国棚倉(福島県東白川郡棚倉町)に移っています。戊辰戦争では棚倉藩は新政府軍と戦い棚倉は落城しました。



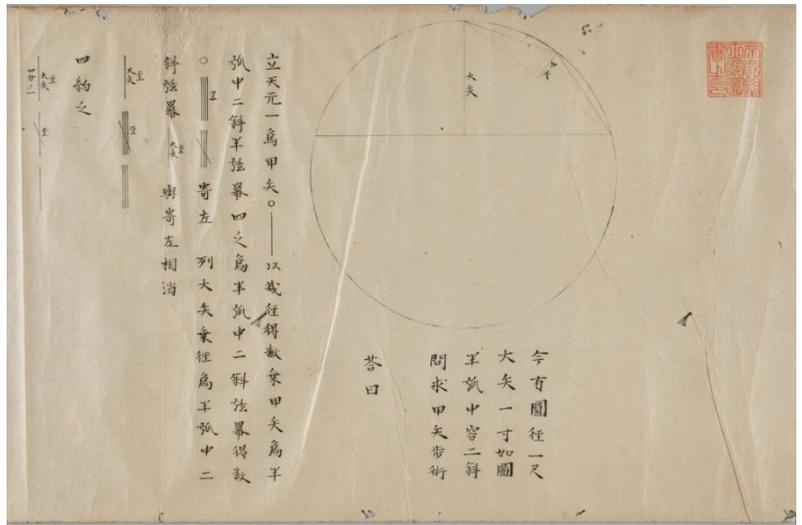
右は箱で左下に「正由様御傳書」のこよりが見える。左は「乾の巻」の巻物

(学習院大学史料館の棚倉藩主阿部家資料 No1690。講演会資料より)

弧背真術 (阿部家資料)

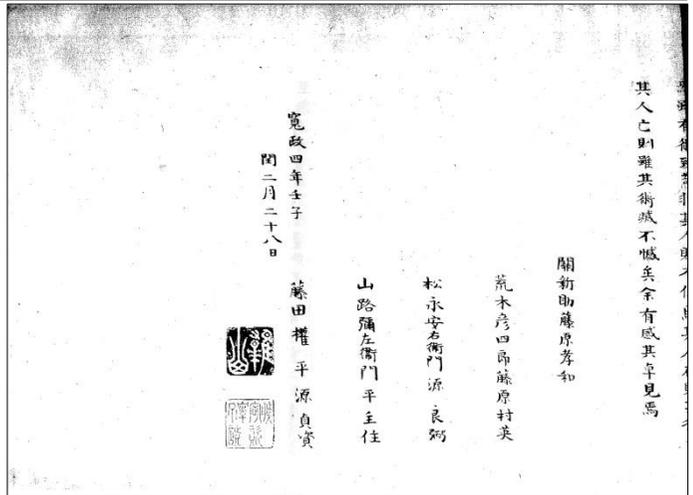


「乾坤之卷」(日本学士院資料・重文。ホームページより)



犬目宿を訪れてから、また佐藤賢一先生の講演を聞いてから、ともに日にちが経過してからの記述となつてしまいました。どちらも興味ある内容で、さらに深く知りたいことが沢山ありますが体調その他でままならず、少しイライラです。拙文の限りですが、気長にやりたい。

編集後記



弧背真術 (阿部家資料) の最後の部分 (宛名がない)